

## 翻訳

マリアンネ・ヴェーバー著

## 「性生活の形式力」(1918)

掛川 典子

## はじめに

本稿は、マリアンネ・ヴェーバー著『女性問題と女性思想』(Weber, Marianne 1919, *Frauenfragen und Frauengedanken. Gesammelte Aufsätze*. Verlag von J.C.B.Mohr, Tübingen) に所収の第13論文「性生活の形式力」(Die Formkraft des Geschlechtslebens. Weber 1919:202-237) の邦訳である。初出は1918年と記されているが、掲載雑誌名等の詳細は不明である。本文は、章立てとは言えないが、長短異なる10のまとまりごとに区切られている。訳文中でも、原文通り\*\*\*で区切りを示した。原文が長いので、本号ではほぼ前半部(202-224)のみを掲載する。

文中でマリアンネ(Weber, Marianne 1870-1954)が強調している単語については、訳文中では太字で表記した。訳者として注意したい単語および人名については、原綴りを( )内に付し、判明した限りで生没年も記した。訳者の補足は< >で記した。訳語については、特に次の諸点に留意されたい。

1. 性に関する単語は、“Geschlecht”と“Geschlechtlichkeit”および“Sexualität”が使い分けられている。後者2単語は「性に関すること」という意味ではあるが、邦訳の文中にはなじまないため、“Sexualität”を「性欲」の意味も含めて「セクシュアリティ」と訳し、ほかは全て「性」で統一した。“sexuell”は「セクシャルな」とし、“geschlechtlich”は「性的な」とした。“Geschlechtsliebe”は「性愛」、「Erotik」は「エロティック」とした。
2. “Verbindung”と“Bindung”はともに「結びつき」と訳した。“Gebundenheit”は「束縛」、「Ungebundenheit」は「非束縛」とした。
3. “Wesen”は文脈により、「本質」、「存在」、「人間」、「人物」と訳し分けた。“Natur”も文脈により、「自然」、「本性」、「人」と訳し分けた。
4. “Leben”は文脈により、「生」、「生涯」、「人生」、「生命」と訳し分けた。その他、“Eigenkraft”は「自己力」、「Wesenskern」は「本質核」、「Zuständlichkeit」は「状態」と訳した。

ドイツの市民的な女性運動穏健派の理論家と言われるマリアンネが、本論文においては、売春とは区別される、結婚前の男女の一時的な性関係の増加という新しい現象を取り上げている。マリアンネは、新現象を端的に否定して時代に逆行させる保守的論陣を張って

いるのではない。新現象が生じてくる背景に社会的必然性を見てとり、歴史的、倫理的考察を加え、新現象のなかにも掲げるべき倫理的理想を追求して、理想実現に必要な要件を解明しようとしている。これまで掛川が訳出したマリアンネの他の論文の場合と同様、新現象を受け止め分析する社会学的態度と、新現象のなかにも理想や理念を求めようとする倫理的態度が、マリアンネの思考に特徴的であるといえよう。また他の論文でも顕著に見られたように、考察に際してマリアンネは常に階級あるいは階層の差異を視野に入れている。社会主義的労働運動や女性解放運動が高まっていく大きな変化の時代にあつて、夫のマックス・ヴェーバー (Weber, Max 1864-1920) の担う社会学や社会政策学の観点や、生活の場であつたハイデルベルク大学で当時主流であつた新カント主義的な文化哲学、価値倫理学、そしてゲオルク・ジンメル (Simmel, Georg 1858-1918) が長く活躍したベルリン大学で提唱されていた生の哲学、といった様々な思想的潮流も垣間見えるようで興味深い。詳しい内容に関しては、次号で全訳を終えたところで改めて解説することにした。

## 訳文

私たちの時代の特別な運命とイデオロギーは、性生活 (Geschlechtsleben) の領域で理想と現実の間の緊張を鋭く高めてしまった——恐らくは文化人の意識のなかで、その生活実践におけるよりもずっと鋭く。キリスト教的=宗教的な一連の表象の財産と、その遺産のなかに入り込んだ「市民的道徳」の伝統を通して作り上げられた、衝動生活の当然な抑制は強く動揺させられた。その場にとり替わったのは恐らく、道徳的な懐疑や、倫理的にどうでもいいことの領域に性的な態度を加えること、あるいは不明瞭な自然主義的なイデオロギーに他ならない。そして普遍的な価値意識の担い手と創造者たちにとって、つまり精神的な指導層にとっては、社会的な原因が全て複合して時に適った結婚と家族形成が次のように困難にされている。即ち、既に長い間この階層の圧倒的多数の男性が、自分たちの性生活の一夫一婦制的形成をまだ最終目標として視野に捉えているものの、その青春生活にとっては最初からそれを度外視するというように。何年もの間のセクシャルな欲求の束縛されない無責任な充足は、男性の長い間広く行き渡った生活実践に適合している。——それに対して**新=現象**は、指導的階層を含めて全ての女性たちの、数千年の古い強制を通してしっかり継ぎ合わされた礼節の、大幅なほぐしである。それを通して初めて売買春と一夫一婦制的結婚の間に、性的な (geschlechtlich) 関係の新しく多義的な中間領域が生じることができた。その領域はこの生活領域の従来の理想に合った形成からは広く隔たったままであるが、しかし他方でその本質に依れば一義的に非難すべき諸現象の最も暗黒の領域からは際立ち、そしてまさにそれゆえ価値意識にとって原則的な態度決定への大きな困難を提供する。

数十年来既にいわゆる関係、「一時的な」性関係 (Geschlechtsverbindung) が定着してしまい、それもプロレタリアにおいてのみでなく、以前の世代においてはまだ厳格な尊敬す

べきという概念 (Ehrbarkeitsbegriffe) と純潔理想を通して婚外の性交渉を抑止されていた、小市民的階層や市民階級の間層の娘たちのもとでもそうであった。典型的な「関係」は大抵は男女双方から、それが一時的につまり現前の享楽のみでなされ、しばしば避妊を通して望まれない責任ある結果から守られる、という明らかな意識を持って結ばれる。そのリスクはそれゆえ今日では、娘のためには**社会的に** (道徳的ではなく) 以前よりもより少なくなっている。そのような関係はその社会学的に独特な特徴をしばしば関与者の地位の相違を通して受取る。自分の社会階層と教育程度に依れば優越している若い男は、エロスの性的でセクシュアルな欲求の一時的な充足を、持続する結びつきや義務への要求を彼にしない、社会的に自分より低い娘との合一を通して求める。——この現象の最も重要で今より変更不可能な原因は、若い女性の家庭生活の困りからの労働市場への流出、家庭外の稼ぎへの女性の不可避的な組み込みである。刺激的な外気のなかで娘たちは、今や単に男性や女性同僚たちの暗示力ある影響を通しての誘惑のみならず、特に彼女自身の本性のより強い欲求の影響にもさらされている。男性たちとまさに同様に近代的な職業生活に駆り出されている者たちは次のような状態にある。即ち、工場や仕事場や海外支店や事務所での仕事により機械的でより一面的で、同じ形式になればなるほど、仕事が神経を緊張させればさせるほど、バランスへの欲求、日常の殻を破る体験や享楽への欲求は一層強く掻き立てられる。一般に都市民のために存在する大抵の就業の仕方が、感情力や精神力 (Seelenkräfte) に影響を及ぼす可能性を皆無かあるいは極端に少なくしか与えない、不可避的に機械化された部分業績を今や要求するということは、確かに近代的な労働過程の恐ろしい悲劇である。その際**個人的なもの** (persönlich) のなかで生活と存在に向けられた女性の本質は、即物性のために素質ある男性よりずっと強く、そして毎日の仕事が味気なければいけないほどそれだけ一層抗しがたく、そのなかで遂に全存在が興奮と情熱と幸福で満たされる、血が通った活き活きした余暇時間を通しての埋め合わせへの欲求が現れる。——その際墮落していない娘を男性から区別するものは多分、彼女にとってはセクシュアリティの充足が、様々な現存在の喜びや女性の幸福や、大多数の職業はそのためには役立たない心情の献身よりも、余り重要でないということである。——そのような性的な非束縛と幸福衝動の義務のない充足が、参与者の内的な礼節にどのように影響するのかが判断が難しく、そして個別の結びつきの特別な感情の陰影によって、またその結びつきのなかに生きる人間のそれ以外の道徳的な実質によって無限に段階がつけられるだろう。粗野な欲望、利己心や強者による弱者の仮借ない搾取は——そして階層の異なる関係においては当然社会的に低く位置する娘はいつも「弱い」側である——、勿論「関係」において売買春におけると同様に効果を現しうる。他方で、情のある親密さ (Innigkeit) を通しての性的なもの (das Geschlechtliche) の変容にとっては余地もあるのだが。——**外面的には**そこから大抵の利益が若い男の手に入ることは典型的であろう。売買春におけるよりも健康の危険が少なく、洗練された衝動充足を若い男は享受する。その理由で確かに多くの性学者が、若い男の一面的利害において関係 (Verhältniswesen) を熱心に宣伝している。しかし

内面的には男性は、そのような結びつきに**権利**を認め、良心のとがめを感じないで関係を取り換えることに慣れるやいなや、ほとんど少しも脅かされない。そうすると非常に容易に彼は醜い精神的な粗暴さに陥るだろうし、極めて緊張した愛のための感情力を失うだろう。内面的な荒廢のこの危険は多分娘にとっては、売買春的關係に陥らない限りはより少ない。というのは、娘たちにとって「一時的關係」(Verhältnis auf Zeit)は原則として、もとよりさしあたりの代用物を意味するに過ぎないのだから、——彼女らにとって真の幸福が到達不能である限りは。忠実や永続性や婚姻上の生活共同体への憧憬は、勿論大抵の者たちにはいつも生きている。もし自身の階層のなかで相応の結婚の機会が与えられるならば、彼女たちはその機会を感謝して掴み、それから忠実な妻になる。——それゆえ、純潔理想が広い層の若い女性たちにますます放棄されることが、平均的礼節の利害においてどれほど望ましくないと——いずれにせよ、数千年抱かれていた觀念に反して——、彼女たちは一時的な性的非束縛を通して、その総体において持続的に破壊されたりしないし、また男性たちよりも強く害されたりしない、ということが確認される。娘たちはそれゆえ自分たちの態度にとって男性と同様の寛容を要求できる。

売買春の領域ではまず事情は異なる。ここでは類責任(Gattungsschuld)は個人のそれとは別様に配分されるのだから、売買春の正しい評価は少なからぬ困難を呈する。それについて男性の総責任は女性のそれよりずっと重い。というのは、全ての、まさに礼儀正しく教養ある階層の男性たちは「需要」に関与し、他方女性の「供給」は無所有で無教養の女性のますます薄くなる層から生ずるのだから。また孤立した事象として考察するならば、個々の男性の側からのセクシャルな必要の代償は、女性の側で身体を売ると同じように品位を落とす。しかし他方で、そのような行為の内面的な影響は根本的に異なる、ということは疑う余地がないままである。自分の性的身体(Geschlechtsbeschaffenheit)を持続する収入源と唯一の生活内容となし、それゆえ男性の欲望を受け入れる女性は、その欲望を確かに沢山の個別事例のなかで一般に初めて呼び起こすのだが、自分の人間の尊嚴(Menschenwürde)を蹂躪し、本質核を害する。他方、個々の男性の責任は、稼ぎを求め彼に提供する個々の売買春者に対して、非難すべき部分行為にとどまる。男性は、自分の本質核にとってのその行為の破壊的な結果を、自分の他の行為や存在を通してそらすことができる。売買春は——根絶不可能な生の現象のひとつであるかも知れないが——私たちの価値意識の前ではいつも端的に非難すべきままであろう。単なる手段としての男と女の相互的な濫用の仕方は、どんな考え得る目的を通してても正当化されないように見えるほど困難に、人間の尊嚴を害する。

もし私たちがそれに対して、私たちの時代の必要に直面して、特定の階層の女性の一時的なセクシャルな非束縛の増加を十分な諦めと寛容を持って考察するならば、特に次の理由でこの増加は起こる。その要求の自由意志による充足は、私たちが今まで国民(Volk)の娘たちと無教養な階層に要求できるよりも、より高い程度の精神的文化を前提とする、そのような道徳的な諸要求を、その全生活様式において古来の軌道から押し出されたこの

階層に提起することは、不当であるかも知れないのだから。社会的な尊敬を要求する者の婚前の純潔が以前はルールだったということは、一般的に決して内面的に習得された理想の結果と見なされてはならない。当時は避妊する手段は欠如していたので、そこでまさに全ての結婚可能な娘は、束の間の一瞬の幸福を通して、婚外の母という自分の全現存在を狂わせる困難な重荷によって、脅かされていると悟った。そして今日では性的な献身の身体的結果の未到来に際して、単純な人々に、罪悪感や後悔や羞恥を識閥へと押し付けることに容易に成功する一方で、当時、自然が権利をだまし取られるのが困難なところで、まだ普遍妥当的な**宗教的な不安表象の圧力**のもとに、人々は立っていた。不安表象がグレートヒェン<以下はゲーテ (Goethe, Johann Wolfgang von 1749-1832) の『ファウスト』(Faust, Eine Tragödie 1808) 第一部「寺院」の「呵責の霊」の一節からの引用である。グレートヒェンは未婚のままファウストに誘惑されて、母親を睡眠薬で殺し、ファウストとの子を水に沈めて殺した。牢獄で狂気にとらわれたグレートヒェンは罪を受け入れ、裁かれるが魂は救われる>の良心の痛みを次のように震撼させながら表現するように。

「神々しい者たちはお前から顔をそむけ、清い者たちはお前に手を伸ばそうとして身震いする。おお悲しい！」

その他に法律的な規約と慣習的な判断の厳しい外的強制がそれに加わったが、それに依れば女性は、しかも女性だけが、単に具体的な重荷のみでなく、規範に反する行為の懲罰と汚名をも担わねばならなかった。勿論それで広い範囲の人々にとって平均道徳の社会的に望ましい標準が今日よりずっと保証されていたが、女性だけを犠牲にしてであった。私たちはそのような状況が帰ってきて欲しいとは思わない。強要された徳も疑いもなく**社会的に**価値があるが、そのような徳は誠実な礼節とは内面的に無関係である。そして全ての考える混乱への十分な自由を男性に与える共同体は、女性の側に規範に合う行為を**強要する**権利を持たない。

精神的に指導する階層の娘たちのもとでの、単なる一時的結びつきの威嚇的な増加に対して、正しい立場を見出すことははるかに困難である。生活の古い家庭的な枠組みの粉碎とその形式と内容の若い男性たちのそれとの同化が、ここでも沢山の若い女性を性的な非束縛に導き入れるということは、確かに秘密のままではありえない。私たちはここで教養の貧しい階層におけるのと類似の一連の原因の前に立っている。そして女性が自分の現存在の意味と本質の完成を第一に愛のなかに、そしてその後初めて即物性のなかに求めることは、典型的な十分に花咲いた女性の本質核に今やふさわしい。礼儀正しい若い女が意識して選ぶのは、たいてい性的な充足ではなくて、愛する人間への心の献身であり、その献身を通して彼女は自分の自己確認と内面的な調和に達する。それで若い女性が職業においてまたエロスのでない人間関係の多様性において自分の精神力を放つ事を学ぶためには、いつでもまずエロスの衝動の精神的昇華の、たいていは痛みを満たした過程を必要とする。——当時人生は女性には今日との比較において、実に苦しみを満たした貧弱な埋め合わせと発達可能性を供したにもかかわらず、エロスの昇華への力は、教養ある階層の未婚の

女性に以前は全く当然として期待され、そのような見解の圧力のもとで為されてもいた。勿論選択の自由がなかった昔は、文化的に教育された階層においてもまた業績は、自由な**選択**よりも規範の勇敢な**甘受**においてしばしばより多く存続した。しかし私たちのもとでは、それがセクシャルなあるいは経済的な扶養結婚であれ、エロスの部分的幸福であれ、**意識的に**断念し、そして誇り高い諦念の陰でそれでもその個人的な完成の限界に達した無数の高貴な人物が生きている。——今日エロスのな生の流れの断念から別の実り豊かな領域への移行のこの道が、以前よりも一層困難に見出されるならば、文化人たちの強烈に現世的になった方向性に並んで、それについてはなお後で語る予定だが、とりわけセクシュアリティの浅薄に自然主義的な解釈もそれに責任がある。その解釈に依れば、セクシュアリティは自然衝動であるので、充足への権利が何としてもそれに帰せられ、標準の人間にとっての現実的な純潔は一般に実行可能ではなく、そして節制は、男性の場合と同様女性の場合も、全存在のゆがみへ、發育不良へ通じるに違いない。そのようなそして類似の思考過程は、周知のように男女双方の若者に言葉と文書で押し付けられたのだが、不安にさせる表象でその想像を満たし、そして、意識の闕のもとで憧憬として眠りつつ全く統括可能なままにとどまっていたものを、初めて意識的な苦境にした。それに加え特定の例えばアカデミックな階層の男性の若者の、売買春とセクシャルな充足のその他の粗野な形式の回避への新たに呼び起こされた努力は、**同類**の若い女性が非束縛な関係に進んで入る気がある点への活気ある関心を生む。——ひとつの関心、それは一部は純粹に理想主義的な素性であり、しかしたとえ無意識の利己心から生じるとしても、一部は自然である。そのような可能性はどう考えても若い男性にとって利点と利得を意味すること、そしてその際容易に、規範に結びつけられている結婚であるよりも、性的な共同体の原則的により高い形式へと上昇した状態を装っていることは、確かに明々白々である。——端的に非難すべき関係を通して汚すことから身を清く保ちたい近代的な若い男性が、しかし同時に、古い結婚前の純潔理想に服することからは遥かに隔たっており、かれらの評価の革命をひそかに実践することはそれゆえ不思議ではない。結婚まで女性に触れられないという数千年把持された要請が、その革命を通して非常に速やかに除去されるだろう。——ひとは今やこの新教育に対し肯定しつつ、拒否しつつ、あるいは待ちつつ振る舞うかもしれず、その教育を、あるいはより誠実でより純粋な状態への発展として歓迎するかも知れないし、従来の礼節総体の柱のさらなる崩壊として嘆くかも知れないし、あるいは不可避の発展の事実として待ちながら甘受するかも知れない。——それでも次の事は明らかであらねばならない。しとやかで精神的に同類の娘との仮の性的合一の新しい可能性から、若い男性にはもっぱら利益が生じ、それを通して生じた新しい状況が教養ある若い女性にとっては予期されぬ生活困難をはらむ事。それらの困難は純粹に**内面的な**種類のもので、何ら思いつきうる外的な姿を通して、価値の内面的方針転換によっても回避されえないという事は。エロスの=性的な体験が典型的に素質ある女性を彼女の**總存在の髓と核**において把握し、そして彼女の全存在にとっては男性にとってとは何か全く別のものを意味する、

という周知の不変な身体的事実が原則的に非束縛に留まりたいし、それゆえ「一時的に」のみ意図された全ての性関係（Geschlechtsbeziehung）においてむしろ、女性の精神的状況が男性のそれとは不平等なために決定的である。というのは、男性の感動がどれほど情熱的で深くあるとしても——通常は感動は彼の自己の本質的な部分には、つまり即物性のなかに、非個人的な世界のなかに沈められた生の根には触れさせないのだから。普通に素質ある、「男性的」な若い男性はエロスの的な体験を通しての衝撃のなかで、集中を途切れさせずに即物的な課題に献身し客観的なものとの関係に身を置くという関心も能力も失わない。男性はむしろ意識において恋人のそばでも**世界**を維持するが、世界は若い女性にとってはまず自分の愛と恋人の背後に沈んでしまう。——個人的なものへの献身のための女性の中心的な素質には、いずれにせよ即物的な行為へのわずかな力と傾向が対応する。それゆえ女性は**総存在**をもって自分の愛の運命に男性よりもずっと依存している。そして、自由にたゆたう、エロティックの上のみ据えられた関係は、同一の日に離別や無くて困らない状態のうちに終わりを迎えるのだが、男性のエロスのな魅力が破られ、女性が自身まだ自分の本質の全部を賭けて愛着している恋人を幸福にする自分の力が弱まるのを感じるころでは、この一時的関係を通しての衝撃は、たいていは痛みと苦悩の他に内的屈辱と女性的な自己確信の重い損傷を女性にもたらす。いずれにせよその上、平均的な素質の女性が不安定な基盤の上に恋愛関係を置く限り、即物的な献身への力と嬉しさは彼女の手からたいてい完全に落ちてしまうだろう。反対の場合には意志に反して別れた男性はこれら全てをいずれにせよ程度に従えば稀にしか体験しない。それゆえ次の事は疑う余地なく見える。原則的に非束縛の関係は、即ち、「試し婚」あるいは性共同体（Geschlechtsgemeinschaft）の先取りを伴う婚約とは見なされないそのような関係は、礼儀正しく深い素質をもつ娘にとってはいつも精神的な冒険であり続ける、という事は。一般に非常に力あふれて精神的に自立した素質の人間のみがそのような冒険を重い危険や内面的損傷なしに乗り切るだろう。——もしも関係が彼女の意志に反して男性の側から終えられた場合、多くの者は離別された苦痛と屈辱から低められた要求をもって新しい関係に逃れようとし、それでエロスのな軽はずみへの道を歩むだろう。そしてなおそれには、まさに今日束縛の無い性的な共同体の危険を減らすものが、つまり、避妊手段の使用が若い人々の内面的な純潔に大きな危険をもたらす、ということが続く。生殖能力の計算された故意の抑止は健康で美学的で倫理的な感情に逆らう。というのは、生殖抑止は性愛の宇宙的な意味に対して罪を犯すことであり、そして自分の享受の責任ある結果を避けるならば、倫理的に発達したあらゆる人間はそれを臆病で秘密の罪として感じるだろうから。確かに、より大きな悪の回避のためにそのような態度をも要する状況がある、——必要なしにはその種の妥協はしない若い人間だけが、自分が愛を穢し人生の不文律の前に有罪であるということを疑わないであろう。

それでもなお私たちの現前のエポックにおいて、そのような関係の増加は教養ある階層においても予期される。というのは、同類の若い娘の従来の束縛を除こうとする若い男性たちの傾向に、娘の側から、全ての他の既に言及した原因と並んで、持続するエロスのな

人生の幸福を求める多くの者の、厳しい時代の運命を通して増加した見通しのなさもまた、譲歩するのだから。このことは、最近まで性的な規範拘束性が、生き方の揺るぎないアプリアリオリとして妥当したそのような階層においても、エロスの代用品を伴う幸福衝動と寡欲への恐らくは良心の咎めを感じない献身を要求する。

\*\*\*

私たちはこれらの可能性に対してどのような態度を取るのか？もしも若者が、理想に適った形態の可能性を多分無益に待ちながら萎れる代わりに、性生活の領域で控え目になるならば、あらゆる危険を冒しても若者は正しくはないのか？諸要求を自らに課す教養ある人間の尊厳にとっては、もし彼のセクシュアリティがエロティックの領域に高められたならば、つまり、もし恋愛即ち特定の他の人間への個人的な惹きつけが魅力的な融合へと彼を強いるならば、十分ではないのか？何が起こるべきか？もしも到達可能な現在の幸福がちょうど良い時に目くばせするならば——運命的な大恋愛とその充足は私たちに決して与えられないだろう、という危険を冒しても無制約に原則的な断念は必要なのか？これらは、今日いよいよもって無数の若い人間を震えさせ、そして個々の探究する人間に対してそれへの一義的な同種の答えを見出すのが困難な、気がかりな問いである。というのは、**全ての人**にとって自明さをもって全人生と多様な領域に広がっている、統一的な基準と倫理的法則への私たちの価値意識の固定は、そこにそれらが基礎づいていたキリスト教的＝宗教的大地とともに私たちの手から滑り落ちたのだから。不撓不屈のキリスト教的宗教性にとって確かにこの世界での生は、来るべき——現世のあるいは来世の——全く別の種類の生の前段階であった。その来るべき生へと個々人は彼の全行為と存在を伴い、全ての不十分さや欠乏を伴って希望を繋いだ。——来るべき地上的なあるいは天上的な至福のそのような確信は、近代の人間にとってそして宗教的人間にとっても非常に深く疑われ、そしてそれとともにまず、かの大地から生じた全ての倫理的価値もまた疑問視された。そのように私たちは昔自明であったものを今日もはや単純には**信じない**。即ち、セクシャルな節制はそれ自体既に神のみ心にかなう賞賛に値する状態であり、被造物の神からの離反としてのセクシャルな享楽と地上的快樂はそれ自体不純で罪深く、それゆえ神によってより悪いものからの防止のために設けられた結婚においてのみ許されているということを、私たちはもはや信じていない。このキリスト教的意味解釈は、近代の人間の無限に多面的な価値意識にとっては、セクシュアリティにも結婚にも恋愛に関してもどの方向においても性的な生活領域を正しく評価しない単純化と見なされる。——私たちはかの**意味解釈**を越えて、単なる否定の理想とは別の理想を性生活上に立てるので、勿論私たちが昔のように原則的に別の**規範**にも到達できるのかどうかは、この論究のさらなる展開のなかでその答えを見出す全く別の問題である。私たちは以前の世代よりも非常に多様な価値表象を伴って性(Geschlechtlichkeit)に歩み寄る、ということが既にここで確認されよう。即ち、それ

らが人生のうえに形式力 (Formkräfte) として意識的に出されるやいなや、互いに×印をつけて消し合い、戦い合い、重大な葛藤にもたらしうる諸評価を伴って。性的な態度の疑えない理想と規範を認識することは、それにもかかわらず可能である。

もっとも、個人的生活 (persönlich) の理想と規範の尊厳は、それらが理念によってのみ端的に**全ての人間**によって満たされうる、ということに依存させられてはならない。道徳的な能力の不十分さのみでなく、個人的な運命の不利さのみでなく、原則的にそれのみ重要であるものが、即ち、特別な個人的な (individuell) 課題のために選ばれてあることの**特別な規定**の意識が、状況のもとでは個々人にとって自分の個人的生活の普遍妥当性 (Allgemeingültigkeit) への服従と統一され得るし、そしてそれ故個人にとっては規範を破り得る。直接的な個人的な (personal) 生活の領域とは別の領域における価値実現への召命が、個別の人間を理想に適う個人的な生活形成からはるかに離れ、不可避的に規範の違反へと導くという場合がいつでもあるだろう。それに依ってそのような人格が踏み出し、従わねばならない特別な作用法則は、多様な価値領域の統一できない諸要求の間の葛藤の印のなかに人格を立たせ得る。そうすると人格は**即物的な領域**のなかの特別既定の履行のために、その個人的生活における不十分さを犠牲にする。多様な価値領域の間の罪深い葛藤とその相互に対立する諸要求のなかにさらにまた無数の人間が置かれている。——この領域の各々の前に立つ諸理想自体の尊厳がそれを通して揺さぶられることはなくして。

\*\*\*

しかし、非典型的な人間が自分の「個人的な法」を通して普遍的なものからの離反へと強いられ得る、という事実よりも私たちに今日より強く迫るものは、規範のもとへの屈服は典型的な規定をされた多くの人間にとって諦念を無理強いするという、以前の時代を覆っていた見解である。その人たちに比べて彼ら非典型的な人たちは自分の特別な素質によれば内面的に劣ってはいないのだが。——性的な諦念は必然的に身体的かつ精神的な萎縮と歪みに導くという、以前に言及した近代的な説は、その一般化において疑いもなく不正である。しかし、自然衝動の充足と特にエロスのな現存在幸福の断念は非常に多くの人間にとって全面的な喜ばしい精神的成長を妨げる、ということは勿論正しい。善良な意志をもつ多くの人々そしてまさに女性たちにとっても今や、わずかな大地に本質を咲かせようとする自己力は拒まれている。そしてもしそれから彼らの萎縮した生命の木に喜びの無い非創造的あるいは全く妬ましげで偽善的な徳のみが育つならば、ここで恐らく理想に余りに多くの犠牲が捧げられてしまったという、ここで道が誤りや墮落や罪を通してもっと良く役に立っていたならばという、痛ましい感情から私たちは逃れられないだろう。内面的な萎縮の厳しい悲劇の沢山のそのような発展過程に直面して、諦念の陰で衝撃を受けて知覚してしまった者は、幸福を必要としている個々の人間にその履行の力がない当為を強いることを、もはや決心しないだろう。——内面的体験を通して私たちに与えら

れた性生活の法則性を、それが自分の力の内に存する限りは各個人がそれに近づかねばならない自己教育の一般的な方針として、しかし、その違反が共同体的な欠陥と道徳的な有罪判決を招来する硬直した掟としてではもはやなくて、人間の上に置くことに彼は甘んずるだろう。

\*\*\*

私たちは今や性生活の形式力に取り組み、そしてそれとともに新たに、人間の尊厳がもし恋愛が自由に委ねられたときには十分行われるかどうか、という問いにも取り組む。というのは、性から自己解放する最も原初の道徳化する力はエロティックであり、魂を吹き込まれた性愛であるから。その本質はどこに存するのか、そしてまず、セクシュアリティとの関係はどうであるのか？自己自身に委ねられた自然衝動としてのセクシュアリティはそれ自身全く選り好みせず、人間の場合も動物の場合のようにほとんどしない。動物はむしろ愛なしでも充足へ押し込み、精神的な力の関与なしに偶然的な対象に満足する。純粹に身体的な必要としての性衝動は精神的で道徳的な人格性総体から完全に分離させられるし、その隔絶された充足は男性の流布した実践に相応する。——衝動を自己自身に据えるそのような分離は、決して内面的でない制限や精神的でない要求に結びつくが、しかしいつも、人間を動物的なものに奴隷化する恐ろしい危険を、そしてそれ以上に、抑制のきかない欲望と常に新種の刺激への病的傾向に人間を引き渡すという危険を、自己の内に孕んでいる。それゆえ性的礼節の理想をおおよそ抱いている誰もが——そしてそれらの理想を常に犯す者たちによっても秘かに尊敬される——、セクシュアルな必要の裸の充足を単に身体的なものという点で、自身の人間的尊厳の損傷として、恥じ入らせる譲歩として感じるだろう。そのような行為に自身巻き込まれている者は、自分の態度を彼の人間性にとって非本質的として意識の最も暗い隅に押しやるか、あるいはセクシュアリティそれ自体とそれへの彼自身の奴隷化を皮肉と哄笑で軽蔑することによって、恥ずかしさと内面の分裂を乗り越えるだろう。そこで、普通の人の刺激に屈服させられ、このことを自分の本質の恐ろしい分裂として感ずる精神的に高い性質の男性たちが、最高に騎士的でない反応をもって、他方の性（Geschlecht）＜＝女性＞の憎悪と苦い軽蔑とともに、その自身の本性の弱さに答えることは稀ではない。——この創造的な自然力を原罪に組みこみ、それに淫行の汚点を刻印したのは、以前からずっと、人間のより高い生にとってはセクシュアリティの誤用とそれに内在する危険であった。一時的に無益にもその暴力から身を守ろうとする深い素質のある人間にとっては、セクシュアリティは死なない虫や消えない火として、神的なものからの墮落へのサタン的な誘惑として現れた。

もし愛によって浸潤され、この感情によって魂の精神的活発さ（*seelich=geitige Lebendigkeit*）の領域のなかに埋め込まれるならば、性は全く異なるまさに反対の意味を得ることができる。——性愛とは何か。そして性愛の中に内在する形式力はその魔法の杖

で動物的なものを美の中に浸し、人間的なものに高めるのだが、その形式力はどこに存在するのか？まずはこのこと、即ち、単なるセクシュアリティの無制限さと無選択性に対して、性愛は選択と個人化を通して**制限する**原則として現れる。人間は、別の性の特定の人物に自分の全存在が自然に引き寄せられる感情として、愛を体験する。その人は彼にとって自身の本質の最高の**補足**として、自身の自我に完成を与えてくれる汝として現れる。「私の全本質は自己の内に完成している」(ゲーテ)。——というのは、単なる身体的な必要とは逆に愛は人間の総存在を捕え、同じ力で身体と魂を還流し、そしてそれゆえ愛の充足を体験した者を、彼の自己の統一性を通してそして別の人物との合一と最も内面的な融合を通して恵むのだから。従って愛は彼に自身の存在の調和と他の被造物とのより豊かな調和を贈る。身体的かつ精神的な性差は、既定の本質側面をもつ男と女に相互的補足を指示する。それゆえこの共同体ほどより内面的でより完全でより幸福にしながら絡み合う共同体はない。——性愛が「美しき瞬間」の奇跡と偉大な持続する精神的な結合を成就する限り、性愛は現存在の偉大な素晴らしさであり、最強の幸福感を生み出し、人間に生存競争のなかでいつも新たに、そこで人間にとって現存在が完成へとまとまる、至福の満足の時間を授ける。愛がそのような状態を授ける限り、愛は春景色あるいは夕焼けに染まった海と同じであり、**自己自身に安らう直接的な現存在価値**であり、その価値はまず決して他の価値領域からの更なる正当化を必要としない。——そして愛はもっと高いものを授け得る。即ち、魂を吹き込まれ感情豊かな人間は、愛による全本質の衝撃の内に、彼が自分の感覚的現存在を越えて神的な存在と世界法則との統一にまで引き上げられて感じるほどに、高められた状態に与ることができる。

「私たちの胸の純粹さにおいて熟慮した、  
より高く、より純粹な、未知のものに  
感謝から自由意志で没頭するというひとつの努力が、  
永遠に名を秘したものを解明しながら；  
私たちはそれを敬虔であると呼ぶ！——そのような至福の高みに  
私は与かっていると感じる、もし私がある前に立つとき！」(ゲーテ)

そのようなエロスのな恍惚のなかで愛の共同体は端的に絶対的で無時間的な価値として体験されるが、その価値は移ろいやすい種類ではありえず、むしろ永遠から永遠へと互いに規定されてあることを示唆する。——

そのような秩序のエロスのな状態においてもセクシュアリティは減ぼされず、それどころかそれは、種類と意味に依ればエロスのな共同体を他の全ての人間の共同体と区別する、滋養を与える底流であり続ける。しかし、身体的衝動は愛のなかで、身体的な必要の彼岸にある精神的な諸力によって捕えられ、価値実現へと強いられるということを通して、人間の尊厳のためにその脅かす暴力を取り去られている。もし一方で裸のセクシュアリティが人間を獣的なものの奴隷にする暴力になりうるならば、——精神が高貴にされた人格性のエロティックのなかではセクシュアリティは、光へと高められた奇跡の花の根づく大地

として現れ、奇跡の花は、そこから養分を取るあらゆる要素的なものを純粋な美に変える。

\*\*\*

性愛はそのような可能性を隠している。性愛によって成立した関係を倫理的な形成に従わせることは不必要かどうか、性愛の特別な価値内容は、もし性愛が単純に自身の自律性に委ねられたままならば、より純粋に展開されないのかどうか、という問いがそれゆえいつも新たに浮かび得る。伝来のキリスト教的な規範授与からの意識の完全な解放に際して、回答は容易には生じない。というのは、勿論かの愛の共同体の価値内容は、その共同体が今や性的かあるいは別の種類のものであれ、その共同体を通して結ばれている人間の相互的な態度が当為を必要としなければしないうほど、傾向と義務の間に緊張がより少なければ少ないほど、意志の緊張が心の衝動の背後に後戻りすればするほど、愛する人間が相互にそうでありまた成し遂げる全てのものが、その生き生きと感ずることの温かさと直接性からより排他的に湧き出るほど、私たちにはいっそう完全と思われるのだから。相互的な奉仕すること、助けること、献身することや犠牲にすることが「愛から」起こり、義務からやあるいは何らかの倫理的な理念のためでないこと、従って**感情力**が関係の形式を規定することは、私たちの意識が愛の共同体に関する第一の理想とするものである。——そして、その結びつきが倫理的な形式力を通して要請されるならば、それでもなおそれは良い意味を持つ。私たちは当為を建てることなしに愛自体に最高の理想として自己力を要求するという逆説、しかし**私たちは同時に倫理的な結びつきの原則的拒否を真実の愛に反すると感じる**という特有の逆説は、私たちの価値意識のなかに存する。それはどのように起こるのか？性的な愛の無尽蔵の自己力のかの理想に十分でありうるが、**事実**としていつも個別化された恵まれた魂のなかにのみ存し、それは例外であって——優勢な過半数のエロスのな共同体にとっては**理念**にとどまる。というのは、これは心理的な出来事の典型的な経過であるから。即ち、現世に縛られている人間の単なる感ずることによって、自分の力の高さに常に留まることは与えられずに、むしろ高く規定された魂においてもそれは上へ下への、変遷の——衰えの——交替の衝動の支配を受けるのだから。そして私たち自身との、並びに補完する汝との一致の、高く幸福にする全ての経験から、それでも地上的な推移は私たちをいつも新たに私たちの不十分な日常のなかに戻す。地上的な分裂と束縛からの忘我の時間ですら——それがどのような内容を持つのであれ、人間に完全さを着せ、そして人間に瞬時はそれ自体神的なものを把握させるのだが——、しかしそれでもって持続する所有は人間には贈与されない。

そこで、意志と当為の一致のなかで、苦勞が無く良好であるという庇護性の感情を、エロスの高揚が他のどんな経験とも違う形で授けるのだが、その感情は**幻想**であり、分裂した日常が私たちをその営為のなかに組み込むときには、再び**私たちが脱がねばならない**

至福の時間の美しい覆いである。そして特に、愛された人間が注入する、自己放棄と溢れ出る献身への力は、私たちが衝動的な利己心から解放する永続的な力だけは所有しない。愛する汝へのエロスのな献身のヴェールのなかには、最高の個人的な生の陶醉や最高の自己享受が隠れており、そしてその特別な内容に依れば、性愛は、自分のものを求めず他者から幸福にされることを期待しないかの別の愛とは非常に異なっている。その別の愛とは、その愛をもって私たちが裸で不完全なまま神から愛されたいと望むような愛である。——そのような愛、即ち、それを使徒の賛歌が告げているように、「兄弟愛」は、それに与かっている者には不変の力でいつも新たに魂から溢れ出る。その特別な本質は、必要としている全ての者に愛が属するということである。他方性愛は、特定の他の人間の**特別性**に燃え立ち、これによって制限されて、もし性愛がもつぱらひとりの汝に向けられるならば、その反作用から栄養を取ってその最高の運命的なパトスにまさにそのとき到達する。そしてさらに、かの**絶対的な愛**のみがその本質に依れば、自分以外の誰にも制約されない魂の自己力として、無尽蔵で不変である。他方でエロスのな共同体の全ての問題は、その感情の色彩が他者の性質に依存し、いずれにせよ相互的な所有の習慣のなかで変化に支配される、ということのうちに根を持つ。そして性愛が、性愛によって結ばれている人間たちの全生命を温めるべき幸福にする力を維持し、そして彼らにとって最も高価な現存在の財であり続けるところでも、それでも性愛は年月の経過において不可避免的にその内容を変える。というのは、たとえどれほど性愛によって結ばれた者たちが弱められていない内面性をもって互いに愛着しあうとしても、——自身の完全性の至福の法悦を性愛は永続的に授けられはしないのだから。

\* \* \*

エロスのな体験のかの両方の基本経験への洞察は、即ち、エロスの体験によって与えられた法悦的な生の高揚と、他方で持続する所有を通してのそのような高みからの魂の必然的な墮落は、今日ある人々の輪のなかに、それが考察される側面に依ってエロスのな「理想主義」あるいはエロスのな懐疑と呼ばれ得る生活実践と論を生んだ。その論は、即ち最高の最も有益な影響を与える現存在価値としてエロスのな状態を個人的生活のただなかに置き、そしてその状態が、あらゆる馴染みない考慮と法則から、特に日常への義務に適った組み込みから自由なままであることを、それゆえ自分の課題や習慣に要求する。エロティックの生活価値は非常に大きいので、エロティックは抑制されずに結果や目的や副次的考察や異質の法則を通して可能な限り臆せず実現されるべきである。勿論、特定の個々の人物のための感情の持続への信仰は幻想であろう。むしろ弛緩した愛の力はいつも同一の汝への専有的関係を通しては必然的に衰えるだろうし、その関係を基礎づけるセクシュアリティは多様な充足を迫るだろう。まさにそれゆえ、愛の共同体を完全に自己力に——倫理的な束縛なしに委ねること、そしてそれを通して個々人に、彼の身体的=精神的な能力

の程度に依ってエロスのな恍惚をいつも新たな形式において体験する可能性を与えることが、要求されるだろう。というのは、たとえ特定の汝への性愛の情熱が不可避免的に日常の塵に帰るとしても、それでも個々人の恋愛能力は決して一回きりの体験を通して尽きるのではないだろうから。人間をそこに制限したがることは——従来の俗物道德のように——、精神的な健康のためには、自然な衝動の危険な抑圧と最高の生活価値のねたましげな禁止を意味するだろうが、他方でエロスのな高揚へのあらゆる可能性の自由な作用は、否定する影響の危険を冒してもかの日常の幸福よりも価値あるところの、最高の程度の温かい血の通った人生の豊かさを生じさせるだろう。

性愛の自由な体験を擁護するこの理論は、エロスのな状態の問題ある = 悲劇的な本質側面への洞察に適している。その理論は、エロティックは自律性に依れば変遷に、衝動に依れば変化にさらされている、という正しい認識から出発する。以前の論述をさらに広げるところでそれに加えてなお次のことが言える。即ち、相互の感情の流出以外は何の内容も目的も自己の内に受け入れない愛の共同体の実質は、尽きることがあると。トリスタンとイゾルデ<リヒャルト・ワーグナー (Wagner, Wilhelm Richard 1813-1883) の歌劇『トリスタンとイゾルデ』(Tristan und Isolde 1859) は、当時のドイツの市民的女性運動の指導者たちによって、恋愛をめぐる議論のなかでしばしば言及された>は**必然的に**愛の死を体験する。それは、彼らにとって自分たちの運命と罪のなかへの巻き込まれの結果、外的な可能性だけではなく、かの魂の力を絶対化する自分たちの情熱の種類によって、互いのために彼ら双方に干渉する何らかの内容をそのなかに受け入れるという内的な可能性をも拒まれているというだけではなくて、彼らが生命力を自分たちの関係の外に横たわる共通性に向けることができないからである。これは深い象徴である。彼らの愛は、人生の豊富な形態を覆い隠す夜を唯一頼りにしていた。昼は、その形態と課題は、昼が愛による独占的な熱狂に余地を与えないのだから、彼らにとっては不気味であるにちがいない。トリスタンとイゾルデは死なねばならない。彼らは個別にも一緒にエロスのでない目標を目指して生き伸びることはできないのだから。——エロスのな感情の火は、もし何らかの仕方で人生のエロスのでない内容と関係づけられるのでないときには、必然的に自身の内で燃え尽きねばならない。そしてさらに、単なるエロティックは私たちの自我とその幸福を求める努力の周囲に私たちを引き留めておく。それゆえいつでもその状態の完全さからは、酔いさましや幻滅や他者からの愛のない離反への覚醒が可能である。それゆえ、その自己力に干渉する全ての課題と法則からの性愛の原理的な解放は、その移ろい易さという点で闘争無き放棄以外の何も意味せず、そして、ひとがかつて至福の時間の幸福をとともに過ごした汝に関しては、その者の内的な運命のどんな考慮も免除することを意味する。エロスのな感情変化の衝撃的な問題は、愛する者の相互的な幸福と依存は双方に同時に消え失せることはほとんどない、という事に存する。大抵一方のみが新しい体験に憧れ、他方もうひとり存在の全ての糸で愛のなかに根を張ったままである。エロスのな共同体の解消は——一方にとっては新しい幸福可能性の原点だが、もうひとりにとってはそれゆえ頻繁に恐ろし

く決定的な人生の破壊をもたらす。人がその人のおかげで幸福だったその人間 (Wesen) を犠牲にして、新しい現存在価値を獲得するというそのような重い罪科を、それでも人間は極端なものが、運命的に悲壮な必然性が問題であるときには、残忍になることなく引き受け得る。——個々の高揚した魂がエロスの享受の原理的な無制限性を、かのイデオロギーがそれを要求するように、その際持続する損傷を負うことなく克服することは、可能かも知れない。典型的な程度の人間にとっては別である。というのは、エロスの多様性に際しては個別体験が平凡さの領域の上に残るが、その多様性は原則的に厳しく愛のない仮借なさを通してのみ贖われるだろうから。そして最後に、もし身体的で精神的な献身がもはや、特定の愛する人間に限られようとせず、原理的に共有財産であるべきならば、エロティックの最高の個性的な価値内容は無に帰す。これは性愛を決定的な運命の地位から冒険へと穢す。というのは、様々な客体でのエロスの身振りの反復はまさに、ひとりの汝との持続する共同体のように、別の種類の価値内容がそのなかに入り込むことはできずに、魂の日常と感情力の鈍化によって脅かされているのだから。エロティックを通してそしてそれによってのみ支えられている関係は、最高の精神的状態と醜いものの深淵との間の狭い山道を浮遊していることは疑いない。その関係はそれ自体「不道徳的」(unsittlich)ではないが、道徳外の種類のものであり、なお「善悪の此方」にある。

\* \* \*

エロスのでない人生価値と関係している場合にのみ、性愛は自身の内において燃え尽きないという洞察からは、愛する者たちが自分たち相互のための共通性の彼岸に目的と課題を見出すという要求が、そして彼らが日々の生活の糧と世界の無尽蔵の豊かさを自分たちの共同体のなかに取り入れるという要求が直接的に生じる。そしてこのことは単に愛の実質の常なる革新のために示されただけでなく、別の理由からでもあるように見える。十分に効果を発揮した性共同体は生き生きとした人間の内的運命のために見極めがたい射程と消しがたい重要性を備え、そしてしばしば彼の全発達を規定するという経験を教える。それゆえ知的な人格の濁りない価値意識の前には、「美しい瞬間」の最も完全な状態ですら男と女の身体的性交の十分な正当化としては妥当しえない。性交はその自然な目的に依ってだけでもすでに重要な結果を伴うので、至福の時間の現在の幸福という地点で——そしてそれは非常にしばしば繰り返されるかも知れないが——終わるならば、それからその十分な意味が奪われる。それゆえ私たちは完全な性愛を責任から切り離して考えることはできない。責任は、性愛によって結ばれた人間たちに彼らの個人的幸福の彼岸で、自分たちの関係の内的原理性と共通の持続する課題を指し示す。しかしエロスの共同体が責任の理念の下に置かれるやいなや、その共同体は倫理的形式的領域に委ねられ、人間を自分の自然な自我の思いがけない衝動から守る価値理念と対決させられる。

そしてそれでは一体何が、責任のかの理念からさらに導かれる規範、その規範を通して

私たちがエロティックをその自己力を越えて倫理的領域に固定できるような規範なのか？結合点はそれ自身の本質要素のなかに見出される。即ち、真の偉大な、それ自身確実な性愛、ふたりの人間の運命的な相互的惹かれあいは、彼らが現在価値にあきあきしていることとその変化可能性と並んで、永続性へや、全体性や生活共同体への憧憬を自身の内に抱いており、結びつきと共通の義務を通して美しい瞬間を越えて、全現存在を浸透している価値ある状態の領域へと高まろう、という欲求を抱いている。考え出された法と因習からでなく自身の最も深い生命中枢から、愛する者たちには忠実や犠牲になる覚悟への、自分たちの生活総体の内的な解かれぬ融合への意志が育つ。**私たちがそれゆえ永続的な責任性へのその埋め込みを性的な礼節の不滅の理想とする場合、私たちは倫理的な価値実現の、自身のなかに沈められている可能性のみを明るみに出し、それらの可能性をその母胎に眠っている別の力による破壊から守る。**その永遠の価値への、身体的かつ精神的な全体統一への、互いのために無時間的に規定されていることへの**信仰**は、あらゆる偉大な情熱の荘重な内容である。日常と運命の変転の中で共通の課題の把持への**意志**、生活の広さ全体における助け合う共同作業への**意志**、——それは倫理的な諸力であり、その倫理的な活力を通して性愛は自身の被制約性と移ろいやすさを越えて、全ての個別のものに及んで永続的な世界法のなかへと高められる。

エロティック自体から発芽するこの倫理的な形式力には親性 (Elternschaft) への意志も属する。愛する者たちはまず直接的に互いに相手だけを望むのであって、子どもたちとの共同体をではない。生殖への衝動は、単なる互いのためにあることに対し広げられた課題と内容を最も直接的に指示し、原則的には生活共同体への結びつきを通して初めて発達する。この衝動は、エロティックとは全く結びついていない新しい特別な、性の価値要素を形成する。この要素はむしろまた結びつきに特別にエロスの実質なしに価値を授け得る。他方、性共同体の倫理的価値を無制約に親性への意志に結びつけることは、個人的な人生の運命の無限な多様性の前に実行可能ではない。親性が内面的権利を伴って不可能になる場合が考えられる。しかし勿論、性共同体は親性を通して初めてその**完全な意味内容**を得るし、そして子どもたちのために責任を負うことのできる結びつきに対し、どれほど重要であるにしても人口政策上の考慮からでなく、その意味内容を要求せねばならない。それでも人間から人間への全く個人的な関係のためには、国家的で民族的な理想の時間的な制約からは、強制する規範は決して導かれてはならない。かの理想はむしろ、それ自体愛とは全く無縁である別の領域から固有価値としてその規範に加わり、そして理想は、個人のために結びつける力を得る以前に、特に認められねばならない。しかし生殖への用意のあることの要求は、かの生殖に無縁な一連の価値においてよりも深く基礎づけられている。修道士の観念の恥辱からのセクシュアリティの解放と自然の創造的な贈り物としてのその解釈はまさに、次の事をはっきりさせることを誠実さの掟にする。即ち、自己自身に委ねられた<放任された>自然は性の享受 (Geschlechtsgenuß) を新しい生命の創造に奉仕させ、この目的には勿論偶然を通してだけではいつも到達するというわけではない。セ

クシュアリティの両方の要素、生殖行為とそれに結びつけられた享受は意図的に互いに分離される、ということは自然に無縁な人間の仕業であり、そして性的な理想主義はセクシュアルな享受の、運命的な解放をその目的関連から原理的に退けねばならない、ということは容易に洞察される。そのような享受がそれ自体罪深いからではなく、単純に、それが最も重要な人間的な人生課題と維持の前からの回避を意味するからである。

\*\*\*

しかしそれとともに私たちは一般にひとつの新しい、これまで言及されなかった問題の前に立つ。その問題は再び私たちを形成された性共同体の衝動的な根へと連れ戻す。セクシュアリティそれ自体にはこれまでの言及のなかでは確かにまだ明瞭な尺度や目標は入っていない。衝動的な要求はエロティックのなかにも存し続け、そして、愛する者たちが倫理的な責任の理念を通してだけで、無制限な強欲と相互的なセクシュアルな誤用から守られるかどうかは問題である。もし性が純粹に自然な経過として放任されたままであるならば、人間の精神的な本性を支配する悪魔的力をセクシュアリティは獲得しようということは、文化を形成した全ての時代の叡智には明らかだった。全ての古い規範はそれゆえ、基本的な欲望をどうにかして堅固な制限を通して制御することに注意を向けた。そして礼節と文化を得ようと格闘している人類には単なる防止が非常に重要に見えたので、価値創造する力としてのその意味解明はまず全く度外視された。性的な享受を堅固な義務に結びつける、法律的に秩序づけられた結婚は、既に早くに至る所で最も有効な矯正方法と見なされた。結婚は勿論まず女性にだけ規範実現の重荷を強いて、他方男性には衝動生活のいくらかでも交換出来る充足への非常に広い遊戯空間を与えた。男性は自分の道徳的で法律的な制限を、根源的に他の男性たちの権利という点だけに見出した。——キリスト教が理想実現を男性にも課し、男と女に原理的に同じ倫理的な禁忌を立て、そして両者にセクシュアルな共同体の厳格な制限を単婚、結婚の忠実、婚前の純潔に求めたことは、両性の完全な精神的な関係のためのキリスト教の決定的な所業に属する。結婚の共同体は、神が原初に設立した秩序として秘跡性格を把持し、従って最高の宗教的に聖化された生活形式の地位へと登った。他方婚外の関係は、その多様な内容と無関係に、きっぱりと罪深く不道徳的として烙印された。その宗教的根の枯死の後、最近まで特定の階層の内的礼節にとって暴力的な形式力を所有していた「市民的道徳」のなかでこの表象は生き続ける。近代的な価値意識もこれまでそこから由来した理想と規範を補足しより深く基礎づけ、いくつかの点では作り変えることができたが、しかし廃止したり全く新しい理想に置き換えることはできなかった。この発達過程は既に次のような方向で起こった。個々人の態度の判断の基準は以前はかの規範から導かれたが、直接的に人間の個別な運命と態度の無限な多様性に届くためには余りに単純な種類であった、ということを私たちの時代は認識した。無限に繊細な区別を伴う、色彩に富んで結び合わされた現実を私たちは正しく評価するようにな

り、個々人に対して評価する判断を抑え、そして特に次のことを認識するようになった。つまり、結婚形式もそれ自体既に性的共同体に規範適合性を授けないし、他方この形式の欠如それ自体既に不道徳的な態度の印と見なされえないということ。しかしこの新しい洞察は別の重要な深い洞察に基づいている。即ち、行動しながらの人生は単に倫理的のみならず倫理外の価値形成物の担い手、**直接的な現存在の価値**、「**状態の価値あるいは現在の価値**」<sup>1</sup>の担い手であるという洞察に。従って、当為の履行と意志の義務にかなった緊張を通しては遂げられず、運命の恩寵として魂に授けられる完全な状態が個人的な生活の領域にある、という洞察に。それらの状態には、エロスの状態や性愛の形成物が属し、それらは彼らの直接的な現存在価値を、その内的幸福と実り豊かさをまず自己自身から、心情の充溢からのみ受け取った。愛の素晴らしさは、少なくともひとりの汝への関係において当為と欲求との間の緊張を使用できる状態として、全ての時代に認識されていた。——しかし近代的文化人が初めて、愛は倫理的な秩序の財産に属さないにもかかわらず、性共同体は愛なしにはない、という要求を掲げる。この解釈に応じて従って性生活はふたつの異なった種類の価値領域から高貴にされ得るが、もし一方で唯一の形式が倫理的な規範を通して、例えばエロスの**情熱**なしに相互の尊敬と共感に基づいて結ばれた結婚が、全く倫理的な秩序の価値構造として承認されるとすると、他方でエロティックによってのみ支えられた結びつきはいずれにせよそのような全く**倫理外**の秩序である。しかし性共同体が私たちの価値意識を完全に満足させる、**理想に適った**形成物になり得るのは、性共同体が形式を両方の価値領域を通して授ける場合にのみである。というのは、当為は確かに愛共同体にとって根源的には創造的な原理ではないが、その意味を現実的に満たしその意味を持続的に可能性の高みに保とうとする意識的努力は、あらゆる人間の共同体が特に性的な共同体がその完全な価値内容に達するために必要とする不可欠な酵素なのだから。

\*\*\*

(かけがわ のりこ 大学院生活機構研究科生活機構学専攻教授)

---

1 状態価値の概念は Stepphun (生没年不明) から由来し、現在価値の概念は H.Rickert (Rickert, Heinrich 1863-1936) から由来する。